

Title	平成十年度博士論文(課程)要旨
Author(s)	
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2000, 40, p. 338-363
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9476
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

平成十年度博士論文(課程)要旨

ブラジル人就労者における日本語の諸相

エレン・ナカミズ

することを目的としたものである。
考慮に入れながら、日本語習得および日本語使用の諸特徴を究明ない。本論文はブラジル人就労者を取り巻く社会言語的な状況をない。本論文はブラジル人就労者を取り巻く社会言語的な状況を日本に在住しているブラジル人就労者は二十万人以上にのぼっ

した。

本論文の対象は、職場で日本語の自然習得がすでに進んだ段階において、地域社会のボランティア団体が運営する日本語教室では出いて、地域社会のボランティア団体が運営する日本語教室ではよって変化するのか。第二に、学習しはじめてからでも、自然習得によるインプットの影響はどれほど残存するのか。第三に、自然習得によるインプットの影響はどれほど残存するのか。第三に、自然習得れらの点は、ブラジル人の自然談話にどのような言語形式で現れれらの点は、ブラジル人の自然談話にどのような言語形式で現れれらの点は、ブラジル人の自然談話にどのような言語形式で現れれらの点は、ブラジル人の自然談話にどのような言語形式で現れれらの点は、ブラジル人の自然談話にどのような言語形式で現れるのか。これらの問題を中心の課題にし、考察した。

本論文は、六章から構成されている。各章の内容は、

次のよう

第一章では、かにまとめられる。

収集し、出現した言語形式の運用を縦断的に、また横断的に分析景について記述した。第二章では、欧米と日本における第二言語習得に関する先行研究を検討し、本研究の位置づけについて論説習得に関する先行研究を検討し、本研究の位置づけについて論説であった。そして、その中から、代表的な三名のインフォーマントを選定した。この三名のインフォーマントを選定した。この三名のインフォーマントを選定した。この三名のインフォーマントの自然談話データをトを選定した。この三名のインフォーマントの自然談話データをトを選定した。この三名のインフォーマントを選定した。この三名のインフォーマントの自然談話データを外側では、論文の目的を述べ、ブラジル人就労者の社会的背景にある。

囲がブラジル人同士に限られている。しかし、徐々にではあるが、成する日常の社会的ネットワークの性質を明らかにした。ブラジル人だちが形成する社会的ネットワークが重要であると考えられる。なお、ブラジル人たちが形成する社会的ネットワークが重要であると考えられる。なお、ブラジル人たちが形成する社会的ネットワークは、「職場内」と「職場外」という二つの領域に分けられる。職場外においては、日本人と接することがわかった。また、日本語能力や日れる。なお、ブラジル人たちが形成する社会的ネットワークは、「職場内」と「職場外」という二つの領域に分けられる。職場外においては、日本人と接することがほとんどなく、付き合いの範においては、アンケート調査の結果を中心に、ブラジル人が形においては、アンケート調査の結果を中心に、ブラジル人が形においては、アンケート調査の結果を中心に、ブラジル人が形においては、アンケート調査の結果を中心に、ブラジル人が形が、

接し、実際に学習しはじめている人が多くなりつつある。ボランティアの日本語教室の増加に伴って、職場外でも日本人と

の習得が意味や機能の習得に先立つようである。 第四章では、「職場内」と「職場外」の自然談話を資料とし、 第四章では、「職場内」と「職場外」の自然談話を資料とし、 第四章では、「職場内」と「職場外」の自然談話を資料とし、 第四章では、「職場内」と「職場外」の自然談話を資料とし、 第四章では、「職場内」と「職場外」の自然談話を資料とし、

立い人は「ね」を複数の文脈で用いるが、そこにはポルトガル語階から多く用いられた。特に、「ね」の使用が注目される。ブラリティ表現の中では、終助詞の「よ」と「ね」が調査の最初の段明の後半では、モダリティ表現の使用について考察した。モダー

た。BI、BA の運用と BM の運用とは異なっていることが判明第五章では、ブラジル人の社会言語能力に関する一考察を試み

最後に第六章では、論文の全体を総括した。

口になれるのではないかと思われる。会的な状況をめぐる社会言語学、また日本語教育の研究課題の糸一側面を調べたことによって、外国人就労者が及ぼした新しい社本論文は、日本語使用の実態という、ブラジル人の言語行動の

カント美学の示すもの

カント『判断力批判』をめぐってー

甲 田 純 生

は

判』に即して検討するのが、本論文の第一の目的である。 でカント美学は真に現代美学の模範となりえるのかを『判断力批 自律美学としての姿を現わす、というのである。このような意味 カントの自然美の理論は目的論の体系との連関から解かれると、 出発するしかない。その模範をブプナーはカント美学に求める。 りにすることはできないのであって、方法としては美的経験から 問題視している。したがって今日の美学は「作品」概念を手がか ような美学は「真理の場」としての「作品」概念を前提にする。 しかし現代芸術の動向は、この作品というカテゴリーを根本から R・ブプナーは、「現代美学の成立条件」と題する論文におい 芸術を真理の場とする現代美学の傾向を批判している。この

ントのテクストから明らかにしなければならない。なぜならば て規定している。 カントは美的判断の内実を、「構想力と悟性の調和状態」とし 我々はこの比喩的な表現の具体的な内実を、

> という概念を手がかりに、この規定の内実を探ってみると、それ る。 いため、「芸術論」においてカントが展開している「美的理念」 ブプナーの言う、 「構想力と悟性の自由な戯れ」が示すものに他ならないからであ 「象徴」と言うべきものであることが明らかになる。 しかしカント自身はこの表現の内実を具体的に記述していな カントによる美的経験の分析とはまさにこの

在者の根拠であり、存在者の真理である。それは、カントにとっ 美的判断の最終根拠としている。 もの」へと導く。カントは弁証論においてこの超感性的なものを ているからである。この二つの反省はともに我々を「超感性的な 象徴となるのは、美に対する反省と道徳に対する反省とが共通し 感情であるかぎり身体との関わりをもっているはずであるから、 ある合目的性を要に、そこに身体性を導入することで、自然の領 は、 を及ぼしうるのだ、ということを保証してくれるのである。次に 美的判断における快は、我々の英知的能力が自然(身体)に影響 おける快の感情は、我々の英知的能力に基づくものである一方 域と自由の領域とが交通可能であることが示される。美的判断に ていたのであるから、この問題は重要である。まずは快の表現で 「美は道徳の象徴である」というテーゼを検討した。美が道徳の 次に問題となるのが『判断力批判』の体系性である。ブプナー カント美学を目的論の体系から切り離すことが必要だと言っ 超感性的なものとは、 一切の存

の模範とすることはできない。これが第 I 部の結論である。 さの領域から自然概念の領域への移行も不完全なものに留まる。 は上の結果、ブプナーの言うカント美学は結局「構想力と悟性の自由な戯れ」と言われているもの、しかもその内実は象徴でしかない。このような美学は「享楽の美学」とも言うべきものである。これによっては芸術に固有の精神は取り逃がされてしまい、方ならは がない。このような美学は「享楽の美学」とも言うべきものである。 これによっては芸術に固有の精神は取り逃がされてしまい、カントは でしてしまう。このような美学を現代美学 は、もはや認識できないものなのである。超感性的なものをこては、もはや認識できないものなのである。

ルノ、 美の起源を告げるものである。 なかで、 動は、 てくる。「美は性的領域に由来する」というフロイトのテーゼは アールの原動力である。こうしてエロースに関する考察を進める 0 の運動を確認した。「イデアールなもの」とは「到達できないも 高 とができないのか。まずはカントの「崇高論」を手がかりに、 ・失われたもの」である。イデアールなものを求める精神の運 では我々は、『判断力批判』から美と芸術に関して何も得るこ ホルクハイマーといった思想家達に依拠しながら次のこと プラトンによってエロースと呼ばれる。エロースこそイデ カントの美学と表裏をなすフロイトの美学が視野に入っ 芸術のなかに、イデアールなものを求める我々の精神 そしてフロイト、 バタイユ、アド 崇

啓蒙の過程で、別々のカテゴリーへと別れていく。③芸術は美とが明らかとなる。①美と崇高は同じ起源をもつ。②美と崇高は、

崇高を再び結びつける。

近世後期漢詩壇の研究

鷲原知良

捉えたものである。 詩の受容、先行邦人詩の受容、漢詩選集の刊行の三つの視点から本論文は近世後期(安永~慶応年間)の漢詩壇の状況を、中国

幕末期陸游詩受容への一視点―」では、幕末期の詩人大沼枕山の第一部「近世後期における中国詩受容の諸相」では、従来の詩の追称に関する編著を旺盛に出版した館柳湾の詩風な化文政期に晩唐詩に関する編著を旺盛に出版した館柳湾の時唐詩受容」は、むしろ晩唐詩の温雅で清澄な面を受けることを、皮日休と陸は、むしろ晩唐詩に関する編著を旺盛に出版した館柳湾の晩唐詩受容」は、むしろ晩唐詩に関する編著を旺盛に出版した館柳湾の晩唐詩受容」が多く用いる盛唐風から南宋風へという概括的な説明にとらわれが多く用いる盛唐風から南宋風へという概括的な説明にとらわれが多く用いる盛唐風から南宋風へという概括的な説明にとらわれが多く用いる盛唐風が表演を正成した。第二章「大沼枕山の剣南体――」では、幕末期の詩人大沼枕山の第一章では、従来の研究第一部「近世後期の日本漢詩は中国の詩をどのように受け容れたのか。

詩の重視や詩材の共通性等の面から明らかにした。
詩人趙翼の詩論を受け陸游の古体詩や愛国詩人としての面を賞揚することを、枕山詩「遺懐倣剣南体」等の考察により明らかにした。第三章「大沼枕山と村上仏山―白詩受容を通じて見る長詩への指向―」では、同時代の枕山と仏山の二家とも白居易の新楽府の新向―」では、同時代の枕山と仏山の二家とも白居易の新楽府を歌行体の影響を顕著に受けることを、仏山校閲の選集『明治名を歌行体の影響を顕著に受けることを、仏山校閲の選集『明治名を歌行体の影響を顕著に受けることを、仏山校閲の選集『明治名を歌行体の影響を顕著に受けることを、仏山校閲の選集『明治名を歌行体の影響を顕著に受けることを、仏山校閲の選集『明治名を振ります。

また、 期の先行詩人の長編古体詩に枕山の関心が向くことに注目し、そ 響を論じるのみでは不十分とする立場から、幕末期詩人が先行邦 詩論を中心に―」では、 れが詠史や詠物等の枕山の長編に結実していることを指摘した。 を枕山の師と見なさない」との説を糾した。第二章「同(二)」 行作の影響が顕著であることを指摘し、従来の評伝が示す「星巌 作品を中心に考察した。第一章「大沼枕山の先行邦人詩受容(一)」 人詩をどのように受容したかを、幕末詩壇を代表する大沼枕山の 枕山詩「宣和硯歌」に従来指摘される五山の詩より星巌の先 |部「近世後期における先行邦人詩受容―大沼枕山の作品と 枕山が直接指導を受けた梁川星巌、菊池五山の影響につい 六如や杏坪を「詩中の奇派」とする枕山の言説には趙翼の 枕山と一世代を隔てた六如、 近世後期漢詩について中国からの横の影 菅茶山、 頼杏坪等、 安永天明

> 編詩の考察により検討し、小野湖山「心太平硯歌」ほか枕山と交 作が同時代や後代の諸家にどのように影響したかを、 た。 が、 雪詩」が明代の詩人徐渭の作とともに蛻巌の「詠雪詩」を受容す 流した幕末から明治初期文人の詩書画との関係を指摘した。 定な世情の中で文人の理想世界である「太平」を頌述祈念する長 である。さらに、第四章「大沼枕山の太平頌述」では、 格調派から清新派へという枠組を再構築する視点を導き得るもの の詩人が格調派以前の先行邦人詩をも受容したことを明らかにし ることを指摘した。また、蛻巌と同時代の新井白石、 る正徳期の梁田蛻巌の枕山への影響について、 影響を看取できる。第三章「同(三)」では、 枕山や同時期の詩人に与えた影響についても検討し、 以上三章で指摘した事例は、 従来の文学史の枠組みにおける さらに時代の隔た 枕山最長の作 幕末の不安 秋山玉山等 枕山の詩 幕末期

では、『五山堂』が化政期詩壇に与えた影響について、巻頭の条を考察対象とした。第一章「『大阪繁昌詩』の引用詩篇」では、関詩が享受されたかを検討した。同書は詩話の側面を併せ持ち、漢詩が享受されたかを検討した。同書は詩話の側面を併せ持ち、漢詩が享受されたかを検討した。同書は詩話の側面を併せ持ち、第三部「文化文政期以降の漢詩選集に関する諸問題」では、従

える。

本論文を「近世後期漢詩壇の研究」と題した所以である。

における五山の言説に注目し、『近人小詩』や『今人詩英』 選集に『五山堂』の近体重視や地方詩人採録の影響が現れている 『同人集』における詩人の採録、 「竹内楊園編『嚶鳴集』」では、枕山に師事した編者による 詩篇に付された評語の考察を 大沼枕 等の

問題点を導き出した。膨大な数の詩人と作品が産出した近世後期 山とその門人の代表作を逸早く詩壇に広めたことを指摘した。第 同年に刊行の二選集がともに古体詩を重視していること、 の漢詩を正しく評価するためには三つの視点の全てが不可欠とい とを指摘した。第四章「『近世名家詩鈔』と『近世詩林』」では 通して、同書が『五山堂』の流れを汲み詩壇批評の役を担ったこ ことを指摘した。第三章「大沼枕山選評『同人集』」では、枕山 に加えて、選集刊行と詩壇という「場」の問題を考えることによ に連なるものとして漢詩選集の流れの中に位置づけた。 『嚶鳴集』を『同人集』と揆を一にし、さらに『五山堂』の系譜 本論文では中国詩受容という緯線、先行邦人詩受容という経線 一詩人のみを細密に調べ上げる研究方法では視野に入らない

ニーチェにおける〈子供〉の生成-

〈子供〉の道徳・身体・産出

如何にしてひとは、あるところのものとなるか (Wie man wird, was man ist.)°

『見よ、このひとを (Ecce homo)』

阪 本 恭 子

自負する彼が子供を、「負い目なきこと (Unschuld)」、「身体 してそのような子供を洞察する過程こそ認識だとし、この認識を 『ツァラトゥストラはこう語った』で説く。否定者、反道徳者を (Leib)」を意味する「精神の比喩」として肯定的に語る。そ (Nietzsche, Friedrich Wilhelm: 1844-1900) は中期の主著 「如何にして子供になるか」を考察することが本論の主題である。 「未来の哲学」の課題とする。ニーチェにおける「子供とは何か」) 第Ⅰ部では、子供を定義する「負い目なきこと」を後期道徳論 ひとは子供であった。換言すると、ひとは子供として産み出さ 「負い目 生きた過去をもつ。ひとが子供に「なる」ことを、ニーチェ (Schuld)」の対概念として取りあげた。 道徳の問

ではいい。 一次の原動力となるのは、価値そのものが「生の条件」として人間の根本をなすからである。悪という価値が内面化した負い目は、「無への意志」ニヒリズムへと結びつく。その批判を通じて「第二の負い目なきこと」が提唱される。これが、「なる」子供の、この負い目なきこと」が提唱される。これが、「なる」子供の、「負い目なきこと」が提唱される。これが、「なる」子供の、「自い目なきこと」が表明される。これが、「なる」子供の、「自い目なきこと」である。負い目はそこで単に否定されるのではなく、ニヒリズムの最終形態「永遠回帰」という「大いなる肯定」に転換せられている。すなわち「負い目なき」子供とは、負に転換せられている。すなわち「負い目なき」子供とは、負にはなく、ニヒリズムの最終形態「永遠回帰」という「大いなる肯はなく、ニヒリズムの最終形態「永遠回帰」という「大いなる肯はなく、ニヒリズムの最終形態「永遠回帰」という「大いなる肯はなく、ニヒリズムの最終形態「永遠回帰」という「大いなる肯はなく、ニヒリズムの最終形態「永遠回帰」という「大いなる情報の表情を通り、

精神であると語り、本来的な人間のありかたを示す。またこの子克」である。自分を超えて創造し続けざるをえない人間の「自己超する。両者は人間という一個体において、内的力動性をもって関ー性を目指す精神は、支配と服従の「闘い」として緊密に「並存」かりあう。自分を超えて創造し続けざるをえない人間の「自己超わりあう。自分を超えて創造し続けざるをえない人間の「自己超わりあう。自分を超えて創造し続けざるをえない人間の「自己超かりあう。自分を超えて創造し続けざるをえない人間の「自己超いある。したがって二ーチェの子供の見体化である身体と単のある。したがって二ーチェの子供の目的であると語り、本来的な人間のありかたを示す。またこの子が明神であると語り、本来的な人間のありかたを示す。またこの子が明神であると語り、本来的な人間のありかたを示す。またこの子が明神であると語り、本来的な人間のありかたを示す。またこの子が明神であると語り、本来的な人間のありかたを示す。またこの子が明神であると語り、本来的な人間のありかたを示す。またこの子が明神であると言います。

て、 いう新たな自己を産出することで、つねに自己を超克する女とし て、 作用を表す。「われわれの内で生成するもの」の精神的妊娠を経 精神の比喩であり、道具、生殖、産出の語源「引き出す (ziehen)」 である。つまり女とは「生殖 (Zeugung)」への意志、産出を行う 描かれる行い、真理、母である女が産む道具と「なる」はたらき は行為の中にあるように」(『ツァラトゥストラ』)と、 産出も精神と不即不離の、ニーチェの表現では「生理―心理学的 概念を、「産出(Erzeugung)」に置き換え、検討した。そのさい な作用である。「母が子供の中にあるように、あなたがたの自己 「われわれ」人間が、女にたとえられるのである。そして子供と つまり自らの道具として生きることが「子供になる」ことだ そこから新しく何かを引き出し、真の自己へ至ろうとする 母としての女の問題も手がかりにした。身体と同じく、 身体かつ 強調して

と理解した。

中世楽書と説話伝承に関する研究

原香苗

高

書研究は、そうした意識に端を発し、中世文学史の間隙を埋めるなかったように思う。中世社会において、音楽とそれにまつわるなが、まないることには、違和感を覚える。本論文における楽伝承が大きな意味をもっていたことを考えるとき、ひとり音楽の伝承が大きな意味をもっていたことを考えるとき、ひとり音楽の伝承、中世の知的体系の一角を占める音楽とそれに関わる伝承

らを正面から取り上げた論考は、ほとんどみられない。したがっに、説話集に収載される説話と微妙に重なり合う興味深い伝承が記されている。そうした意味で、楽書は重要な意味をもつと思われる。ところが、楽書に関しては、三大楽書とよばれる『教訓抄』でいる。そうした意味で、楽書は重要な意味をもつと思われる。ところが、楽書に関しては、三大楽書とよばれる『教訓抄』に、説話集に収載される説話と微妙に重なり合う興味深い伝承が関する知識のみならず、しばしば説話集との関連が説かれるよう

以下に、本論文の概要をまとめておく。 やの諸相をも、透かし見ることができるのではないかと思われる。 可能になると考えられ、さらには、それらの背後に広がる中世文 があるといえる。そうした作業を経て、楽書それ自体を正し ない。ないのではないかと思われる。 であるといえる。そうした作業を経て、楽書それ自体を正し ない。 であるといえる。そうした作業を経て、楽書とれ自体を正し

成とも密接に連関していることを明らかにし得た。で、中世楽書の基礎的研究」と銘打った第二章では、『體源鈔』の生活が当時の政治状況と深く関わっており、大著『體源鈔』の基礎のであるによるものでありながら、これまでほとんど顧みられることのなかった楽書『舞曲之口伝』について検討を加え、本書のに著者によるものでありながら、これにより、『體源鈔』ととのなかった楽書『舞曲之口伝』について検討を加え、本書のに著者によるものでありながら、これにより、『體源鈔』の基礎が当時の政治状況と深く関わっており、大著『體源鈔』の基礎が当時の政治状況と深く関わっており、大著『體源鈔』の基礎が当時の政治状況と深く関わっており、大著『體源鈔』の基礎が当時の政治状況と深く関わっており、大著『體源鈔』の基礎が当時の政治状況と深く関わっており、大著『體源鈔』の生態とも密接に連関していることを明らかにし得た。

城楽物語』や幸若舞曲『入鹿』に流れ込む還城楽説話を記す点で一章では、楽器名物譚を記す楽書『名器秘抄』の位置づけを行うとともに、この書物によって説話集や楽書、『平家物語』などのとともに、この書物によって説話集や楽書、『平家物語』などの「中世楽書と説話伝承」と題した第二編では、未紹介楽書の紹

当該各章に詳しいが、いずれも中世文学研究に資するところ大で治としていることを指摘し、その伝承がいかにして固有の物語へと発展していることを指摘し、その伝承がいかにして固有の物語へと発展していることを指摘し、その伝承がいかにして固有の物語へと発展していることを指摘し、その伝承がいかにして固有の物語へに本(『名器秘抄』『舞楽雑録』が、『教訓抄』の古い形の本文を伝注目される楽書『舞楽雑録』が、『教訓抄』の古い形の本文を伝注目される楽書『舞楽雑録』が、『教訓抄』の古い形の本文を伝

中世文学ないしは中世文化を考えるに際し、楽書とそこに記される伝承に関する問題の多くは、看過されてきた。楽書の読解には専門的な知識を要する面もあるとはいえ、楽書に関する研究がた。さらに注目すべき伝承を記す楽書をとりあげることにより、要な楽書に関する基礎研究を行い、『體源鈔』研究の基盤を整えた。さらに注目すべき伝承を記す楽書をとりあげることにより、を楽書の新たな価値を見出し、さらには、これまでの研究とは異なる角度から、中世文学ないしは中世文化を照らし出すことがである楽書の新たな価値を見出し、さらには、これまでの研究とは異なる角度から、中世文学ないしは中世文化を照らし出すことができたのではないかと考える。

繁昌記ものの研究

新稲法子

幕末から明治にかけてのわが国の文学の実態を明らかにするこれる作品群がある。一文芸としての豊かな表現はもとより、そのの日本文学に抱いていたイメージを一変させられる。そのうちのの日本文学に抱いていたイメージを一変させられる。そのうちのの日本文学に抱いていたイメージを一変させられる。そのうちのがよったは当時のベストセラーになっており、これを抜きにしていくつかは当時のベストセラーになっており、これを抜きにしていくつかは当時のベストセラーになっており、これを抜きにしている。

あると考え、本論文に翻刻掲載した次第である。

発展の様相が明らかになるよう考察した。どのような作者による作品であるか、ジャンルとしての成立からげ、個々の作品の分析を通して、繁昌記ものがどのような位相の中ることを目的とするものである。代表的な繁昌記ものを取り上本論文は、この繁昌記ものを文学史上の一ジャンルとして確立

とのいくつかに修正を施し、繁昌記ものの定義と特徴を明らかにの研究序説」と改題して既発表)において、従来いわれているこそのためにまず、序章の「繁昌記ものとは何か」(「繁昌記もの

第一章の「『江戸繁昌記』の「繁昌」」で詳述した。にない日本独自の書名については、寺門静軒の作品をとりあげたしている。その特徴のなかでも、「繁昌記」という、中国の漢籍

繁昌記ものはその内容故にこれまで社会風俗研究や思想史の資料として取り上げられることがほとんどであったが、文学作品としての先行研究には前田愛氏の業績がある。前田氏はこれを幕末・維新の過渡期の文学として着目され、中国の艶史の流れを汲むものと位置づけた。第二章「『江戸繁昌記』と『東京夢華録』」は、『江戸繁昌記』の作品論を通して、前田氏以来の繁昌記もの観を修正し、中国の王朝の交代期に民間人によって記された傍流の地を五がどのような位相の作者によるどのような作品であったの繁昌記』とを指摘し、作品論を通して、『江戸繁昌記』という最初の繁昌記がどのような位相の作者によるどのような作品であったのかを考察している。

に対する従来の説をいくつか正している。社会の暗部により深く「『都繁昌記』の成立」はその「解題」に加筆したもので、出版ものの註解を刊行したが(『都繁昌記注解』大平書屋)、第四章棕隠の『都繁昌記』である。筆者は学位申請と同時にこの繁昌記寺門静軒の『江戸繁昌記』に続いて世に出たのは、京都の中島

のは、 繁昌詩はその一派でもある。この繁昌詩についても、 行した漢文学のジャンルに土地の名所・風俗を詠む竹枝詞があり 繁昌詩と題するものも刊行されている。繁昌記ものと同時期に流 の章について写本の形で伝わった劇書の影響を指摘した。 方を考察するため、第七章「『都繁昌記』「劇場」の章の手法」 戯作である狂詩と繁昌記ものの関係を考察した。また、繁昌記も 下 にあるという従来の説を改めて検証し、修正した。 狂詩」(原題「『都繁昌記』三都穴探しの視点」)では、 作者中島棕隠は有名な狂詩作者であり、 切り込んだ棕隠の心境を用例を通して説いた作品論である第五章 「「繁昌詩」の淵源」で取り上げ、繁昌記ものが竹枝詞の系譜上 「『都繁昌記』の「都」字」 (原題「『都繁昌記』「都」字小考) (原題「『都繁昌記』 近世のこの二大繁昌記の他に、 第七章まで既発表の『都繁昌記』論に加筆したものである。 さまざまな和俗の文学を取り入れているが、その摂取の仕 考―劇場の章を中心に―」)では、「劇場」 繁昌記ものの流行に触発され、 第六章「『都繁昌記』と 同じ漢文 第八章 以

誌』を取り上げ論じている。に当時大流行した服部撫松『東京新繁昌記』と成島柳北『柳橋新質していったのか、終章「繁昌記ものから近代文学へ」では、主質後に、幕末に誕生した繁昌記ものが、明治期にどのように変

「五国史」宣命の国語学的研究

田 幸 恵

池

遷していくのかについて考察した。 『指日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』 『日本三代実録』の「五国史」には、二三五詔もの宣命が収められている。和文の詔勅であるこれらの宣命は、主として日本語ののできる貴重な資料である。しかし、従来の宣命研究は『続日本紀』に収められた六二詔の宣命を中心に行われており、『日本後紀』に収められた六二詔の宣命を中心に行われており、『日本後紀』に収められることはなかった。本論文においては「五国史」宣命全体を視野に入れ、第一編では宣命の文章構造を考察し、第二 事では宣命体表記のあり方が「五国史」宣命の中でどのように変 遷していくのかについて考察した。

第一編 宣命の文章構造

皇から諸陵・諸社に奏上されるマヲス系宣命と、僧官の補任に関宣命には、天皇から臣下に発せられるノリタマフ系宣命と、天

の宣命の文章構造について考察を行った。して出される僧綱宣の三種の宣命がある。第一編ではこれら三種

現に現れる文章構造になっていることも合わせて論じた。命を取り上げ、宣命の冒頭表現・末尾表はり、その文章上に宣命使の主体的な立場が現れることはない、ということを明らかにした。また、僧綱宣の場合には、ノリタマと系皇命とは異なり、宣命使の主体的な立場が現れることはない、ということを明らかにした。また、僧綱宣の場合には、ノリタマフ系宣帝とは異なり、宣命使の主体的な立場が現れることはない、ということを明らかにした。また、僧綱宣の場合には、ノリタマフ系宣第一章「ノリタマフ系宣命の文章構造」では、ノリタマフ系宣第一章「ノリタマフ系宣命の文章構造」では、ノリタマフ系宣

が現れることはない、ということを論じた。ノリタマフ系宣命と同様に、その文章上に宣命使の主体的な立場上げ、その文章構造について考察を行い、マヲス系宣命の場合、第二章「マヲス系宣命の文章構造」では、マヲス系宣命を取り

第二編 宣命体表記の変遷

表示の変遷を考察した。

・おいっと「四国史」宣命を比較する形で、宣命における助詞・助動詞添えるものの三種の表示方法が存する。第二編では、続日本紀宣助字で表記されるもの、万葉仮名も漢文助字も用いず助詞を読み

第一章「宣命の助詞表示」では、助詞の読添えに注目し、それ

は、

第三章「宣命の漢文助字-

―助詞相当の助字について―――」で

うに用いられているのかについて考察を行い、多くの助字が「四

日本語の助詞に相当する漢文助字が「五国史」宣命でどのよ

ことを明らかにした。

ごく少数になり、多くの助詞が万葉仮名で表記されるようになるに合っでは多く見られた助詞の読添え例が、「四国史」宣命では類型表現や定型的な宣命を取り上げ考察した。その結果、続日本類型表現が定型的な宣命を取り上げ考察した。その結果、続日本

が読み添えられているのかについて考察を行った。げ、同じ目的語と動詞の組み合わせにおいて、どの程度「を」格第二章「宣命の「を」格表示」では、格助詞の「を」を取り上

の助字とは異なる性格も有していることを明らかにした。 第四章「宣命の漢文助字――助動詞相当の助字について考察を行った。その結果、多くの助字が助詞相当の助字と同いて考察を行った。その結果、多くの助字が助詞に相当する漢文助字――助動詞相当の助字について――」 国史」宣命に至り用例数を減少させていることを論じた。

Postmodern Metamorphosis:

Capitalism and the Subject in Contemporary American Fiction

石割隆喜

本博士論文は、ポストモダニズムと称される後期資本主義文化を生きる「ポストモダン的主体」を第一に特徴づけるものは「変身」であるとする立場から、四つの現代アメリカ小説を読もうとけるものである。Foucault, Gass, Althusser, Marx, Lyotard, Austin, Deleuze and Guattari 等の理論に依拠しつつ、同時にCindy Sherman と Jo Spence によるフォトグラフィック・セルフポートレイトを実践の分野における例として参照しながら、本論はポストモダン的主体の「変身」の型として、"formation"(主体の生成、「主体化」)と"deformation"(主体の変形、「奇格テクストに刻み込まれた「変身」の具体的かつ個別的な形態を各テクストに刻み込まれた「変身」の具体的かつ個別的な形態をあった。

テクストによって表象される(ある)主体の"de/formation"また、この「変身の形態」は表象の問題とも密接に関連する。

業をそれぞれのテクストについて行うことが、本論のもう一つのを明らかにすることができるのではないか。その歴史性解明の作張・闘争関係のなかで捉えることによって、われわれは当のテク張・闘争関係のなかで捉えることによって、われわれは当のテクのあり方を、同じテクスト内のものであれその外の文化領域に見

目的である。

性主体を相対化することを試みる。 性主体を相対化することを試みる。 第一章では Thomas Pynchon の The Crying of Lot 49 が論 第一章では Thomas Pynchon の The Crying of Lot 49 が論 第一章では Thomas Pynchon の The Crying of Lot 49 が論 第一章では Thomas Pynchon の The Crying of Lot 49 が論 第一章では Thomas Pynchon の The Crying of Lot 49 が論

ウォーの追放は、彼のその「もう一つのアメリカ」創造の行為がciation における「虚構創造」(fiction-making) の問題を、やはり主体の問題として読むことが試みられる。このような視点に立 第二章では、Robert Coover の The Universal Baseball Asso-

でいるかということである。 いう「尽きの文学」の詩学といかに逆説的なかたちで関係を結んいう「尽きの文学」の詩学といかに逆説的なかたちで関係を結んい的父権性の論理――の「引用」であることに起因するとされな本質的に「アメリカ的普遍性」――資本主義経済とホモソーシャ

第三章では、Donald Barthelme の The Dead Father が「モにから見た場合、この死父の埋葬の物語――彼の身体の「物質性」は、小説という「メディア」(medium) そのものを前景化しようとするこの実験的作品が市場の論理に難なく取り込まれてしまうことのアレゴリーとして再定義されることになる。第四章では、Don DeLillo の White Noise における身体を第四章では、Don DeLillo の White Noise における身体をが、またが、このような視りにある。このような視りにある。このような視りにある。このような視りにある。このような視りにある。これはすなわち、などのアレゴリーとして再定義されることになる。これはすなわち、などのアレゴリーとして再定義されることになる。これはすなわち、などのアレゴリーとして再定義されることになる。これはすなわち、などのアレゴリーとして再定義されることになる。これはすなわち、などのアレゴリーとして再定義されることになる。これはすなわち、などのアレゴリーとして再定義されることになる。これはすなわち、などのアレゴリーとして再定義されることになる。これはすなわち、などのアレゴリーとは、から表によりにないます。

可能性が開けてくる。 第四章では、Don DeLillo の White Noise における身体を でれる――を原因とする、本質的に修辞的な病として再解釈する される――を原因とする、本質的に修辞的な病として再解釈する では、Don DeLillo の White Noise における身体を 第四章では、Don DeLillo の White Noise における身体を 第四章では、Don DeLillo の White Noise における身体を

後期資本主義文化において(おそらくは)「残余的」な表現媒体となってしまった「小説」のなかに、「変身」(とくに第二ののをできるだけ「濃密に」記述すること――。これがポストモダン・アメリカ小説を「いま」読む者がなすべきことであるというのが、本博士論文が結論として主張することである。

近世初頭の所司代に関する研究

―寺社との関係を通して―

伊藤真昭

朝廷・寺社に焦点をあて、特に寺社を中心に論を進めていく。する職掌が加わった。そこでここでは近世的所司代の特質であるは室町時代から存在するが、近世初頭の所司代は朝廷と寺社に関本論は近世初頭に成立した所司代に関する研究である。所司代

に成立したということが明らかになった。そのことを如実に示す先ず所司代そのもの成立と展開を探り、近世的所司代は豊臣期

以外は幕閣が担当するようになった。

以外は幕閣が担当するようになった。

以外は幕閣が担当するようになった。

以外は幕閣が担当するようになった。

ない地下人、一方豊臣期以降のが官位である。織田期は昇殿できない地下人、一方豊臣期以降のが官位である。織田期は昇殿できない地下人、一方豊臣期以降のが官位である。織田期は昇殿できない地下人、一方豊臣期以降のが官位である。織田期は昇殿できない地下人、一方豊臣期以降のが官位である。織田期は昇殿できない地下人、一方豊臣期以降のが官位である。織田期は昇殿できない地下人、一方豊臣期以降のが官位である。織田期は昇殿できない地下人、一方豊臣期以降のが官位である。織田期は昇殿できない地下人、一方豊臣期以降のが官位である。

に政権との距離を短くするために日常的に親密な関係を構築しなに対して干渉を強めていったという見解に対して疑問を呈した。時社の中には検地を免除されているところもある。また政権からの干渉事例としていわれていたことは、すべて、逆に寺社側からには豊臣政権が自力救済を否定し、政権の裁定による解決をその裁定を求め、その結果訴訟は増大した。豊臣政権は寺社に干渉を強めてくるような存在ではなく、むしろ寺社上層部にとっては自己基盤の確立のためには必要不可欠な存在であった。このようの裁定を求め、その結果訴訟は増大した。豊臣政権は寺社に干渉を強めてくるような存在ではなく、むしろ寺社上層部にとっては自己基盤の確立のためには必要不可欠な存在であった。このよう自己基盤の確立のためには必要不可欠な存在であった。このよう自己基盤の確立のためには必要不可欠な存在であった。このよう自己基盤の確立のためには必要不可欠な存在であった。このよう自己基盤の確立のためには必要不可欠な存在であった。このよう自己基盤の確立のためには必要不可欠な存在であった。このよう自己基盤の確立のためには必要不可欠な存在であった。このよう自己を対しては、所司代は寺社の大のでは、対しては、対しては、対しては、対しては、対しては、対しては、対した。

者も豊臣政権がその人選を行っていた。
おいし、中には寺法で公儀への音信を怠ってはならないことを制定している事例もある。また寺社毎に設定されていた取次にも同定している事例もある。また寺社毎に設定されていた取次にも同定している事例もある。また寺社毎に設定されていた取次にも同定体的に活動している能動的なものだといえる。一方、門跡は一上体的に活動している能動的なものだといえる。一方、門跡は一大の寺社よりも豊臣政権の影響力が大きいようである。官位にしてみても、本来は天皇よりの口宣によって任ぜられるものであるのに、秀吉の不在を理由に任ぜられなかったり、また門跡の後継者も豊臣政権がその人選を行っていた。

進展しかなく、その完成は徳川政権に引き継がれていくことにな復である。前者については豊臣家の先祖供養のための大仏千僧会の上層部の権威を高め、その自律性の回復を援助することにより、の上層部の権威を高め、その自律性の回復を援助することにより、上層部さえ掌握すればいいという体制をつくろうしていた。しかしその援助は個々の訴訟の提訴を前提としていたための大仏千僧会政策は、門跡など寺社の頂上部を掌握することと、既存の秩序回政策は、門跡など寺社の頂上部を掌握することと、既存の秩序回政策は、門跡など寺社の頂上部を掌握することと、既存の秩序回政策は、門跡など寺社の頂上部を掌握することと、既存の秩序回政策は、門跡など寺社の頂上部を掌握することと、既存の秩序回政策は、門跡など寺社の関から豊臣政権をみていくと、その基本的な寺社の上の大人には、門跡など寺社の上の大人には、門跡など、寺社の関から豊臣政権をみていくと、その基本的な寺社の大人になる。

った。

最後に公家についてである。統一政権と朝廷を結んでいたのが、 最後に公家についてである。統一政権と朝廷を結んでいたのが、 の伝奏補任においても豊臣期に一つの画期があった。それはそ この伝奏補任においても豊臣期に一つの画期があった。それはそ この伝奏が朝廷による補任と将軍の承認であった。それはそ の関係が深い公家が伝奏に任命されたのである。それは表 専門李であった。中近世を通じてこのような伝奏は彼一人し かいない。秀吉との関係が深い後陽成天皇を支える両輪が伝奏と が同代であった。

清代江南デルタ地方社会と治安維持装置

田 出

太

中国江南デルタ地方社会を照射しようと試みるものである。゙犯本研究は、一七~一九世紀の犯罪と治安の歴史的研究を通じて、

している。 あった。本研究は、 手段となりうるはずであるが、これまでこのような意識は稀薄で されていくと考える時、 社会環境ないしそれに規定されつつ発生する犯罪に対応して整備 する諸問題とともに有機的に捉えようとする時、 罪は社会の総体的現象である』と規定し、 かかる研究上の限界を克服することを目的と 犯罪と治安は自ずと社会史の有効な分析 犯罪を当該社会に内在 治安維持装置を

畤

以下、 本論部分は第一部三章、 各章の内容を簡単に概観しておく。 第二部三章、附編一章から構成される。

響を受けつつ発生したと推定される江南デルタの強盗事件は、 第二章 会に展開されていく過程を考察した。米価や手工業製品価格の影 スキナー・モデルの がそれを自らの 流通の保護を目的としたこと、後者は実際に交通路 中心とする空間的広がり(市場圏)に配置され、 って警察業務に従事したこと、両者ともに明確な管轄区域が設定 察した。汛は「大汛」「小汛」の二階層から成り、 最末端単位「汛」の組織編成・空間的配置・管轄区域について考 第一部第一章「清代緑営の管轄区域とその機能」では、 特に前者のそれは市場圏とほぼ一致していたため、 「清代緑営の汛防制度と江南市鎮の犯罪動向」では、 ″領域″とみなす場合のあったこと等を指摘した。 「中間市場」に当る市鎮を中核とする地域社 人の移動や商品 前者は市鎮を (水路) 市鎮側 緑営の 汛が に在 水

> さに江南デルタをめぐる人口流動に対応するものであった。 流動性の高い船上生活を続ける太湖の漁民、 前期、 みなされ、国家権力による監視体制が整備されていく。これはま 込み棉布のつや出し作業に従事する踹布職人等が潜在的犯罪者と 力を投入し、秩序の回復を図った。治安が相対的に安定すると、 時に、武装勢力=海寇・湖寇が抵抗する沿海・沿湖地帯にも兵 成立当初、 罪動向と犯罪抑圧の変遷について通時的な検討を行った。 の暴力を排除し、 済的力量を有する人々は、 路で航船 商業路沿いに展開し、 「中間市場」在住の下級知識人(生員層)や商人など政治的 緑営の汛防制度と犯罪抑圧の変遷」では、 (乗合船) を襲撃する例が多いため、 人口・財貨の集中する都市に軍隊を駐留せしめると同 市鎮発展の基盤を築こうとした。 商業・交通環境の整備に乗り出す。 国家の暴力装置を招致することで民間 江南の諸都市に流れ 清朝は汛を駅伝路 江南デルタの犯 第三章「清代 清朝は

に政治に反映させるために上級の州県へと繋ぐ回路 移駐することである。 態について考察した。 任じていた。分防は招致した生員層や商人の要求を直接的間接的 た上で、警察業務、 の背景」では、州県の佐雑(県丞・主簿・巡検) 第二部第四章「清朝中後期、 軽微な刑事案件の処理など多岐に渉る職務に 佐雑は県域を分割し戸口の分担管理を行っ 分防とは行政都市を離れ、 江南デルタ州県官の「分防」とそ とりわけ市鎮に の「分防」の実 (現実的目的)

法として、彼らの監視と閉じ込めを提案した。これは国家権力が 使陳弘謀が乞食等に対する犯罪予防、累犯に対する再犯防止の方 察した。人口爆発に伴う周辺農村からの貧困層の流入、彼らによ 犯罪と拘禁施設」では、 葉の江南デルタにすでに清末の刑務所「習藝所」の萌芽が見られ 的な拘禁施設「自新所」の誕生と普及を確認できた。一八世紀中 普及状況について考察した。中国古代の刑罰思想は一般予防主義 国家権力の象徴 かる犯罪観・刑罰思想を背景として誕生したのであった。 れた窃盗〟に介入するに至ったことを意味し、自新所はまさにか より直接的に ^これから犯されるであろう窃盗〟や ^すでに犯さ る窃盗事件の増加が問題となっていた江南デルタでは、 たことは注目に値する。 その周辺に窃盗など軽罪犯に対する教育をめざした自由刑執行場 改革で初めて誕生したと理解されてきた。しかし乾隆期の蘇州と られる。第五章「清代地方監獄考」では、 応報刑主義が優越し、特別予防主義・教育刑主義は清末の司法 (観念的目的) という二つの意味を有したと考え 第六章「清朝中期、 自新所誕生の社会経済的背景について考 地方監獄の機能分化と 江南デルタの貧困 江蘇按察

により国家・軍隊が救われたと述べる。その場面は邪教鎮圧と辺は緑営の指揮官の皇帝への戦況報告中に見られ、関羽の〝奇跡〟説を用いて、清朝と関羽崇拝の関係の再検討を試みた。霊異伝説附編第七章「清朝国家・軍隊・関聖帝君」では、関羽の霊異伝

国家的物流としての漕運

-明代北京の現物米財政と畿輔経済---

田 口 宏二朗

て支出された。当然、当地の人員数増大に伴い支出年額は上昇。転されるこの収入部分は、概ね首都在住の軍事要員へ人件費とし新一章 国家的経費としての漕・白糧 漕運を通じ北京に移

を方向付けていた。 京の財政的な糧米需要は、現物―銀遣いという支払い手段の選択態は銀建てへと切り替えられ、現物財政規模自体も縮小する。北削減が行われ、支出額は一気に低下。これに伴い、漕糧の収入形削減が行われ、支出額は一気に低下。これに伴い、漕糧の収入形工出出以降この収入部分が定額化され、収支は一時期極めて悪

第三章 国家財政と再分配 在京官の俸禄・京衛軍士の月糧ともに、一五世紀以降、月額一石という『平等な』原則を以て各ともに、一五世紀以降、月額一石という『平等な』原則を以て各ともに、一五世紀以降、月額一石という『平等な』原則を以て各ともに、一五世紀以降、月額一石という『平等な』原則を以て各人流出する契機は至って少なかったことを示唆する。

する物資循環過程は、本来すぐれて自己完結的であった。一方、第四章 需給構造の変容 南方地域からの漕糧供出を起点と

成する物資循環がその外延を拡大、民間自生的な物流の裡に融解の米穀需給構造に巻き込まれる。この過程で、各在京人員の受領量増大が想定できる)られるに伴い、財政的収放は必然的に当地する給与支払いが銀建てに切り替え(背景として当地の米穀供給一六世紀以降、この状況に若干の変化が見られる。在京人員に対

していったのである。

薄なこの地域は、 に、 輔) して見いだせない。 敢行され、これらの要素賦存に関わる変数は上昇傾向へ入る。 た地域であった。北京―江南間の交通路に近接し、 に進行。一方、東部の河間府は相対的に活発な商品流通が行わ い。ただしその市場構造は開放的であり、固定的な分業構造は 第五章 西部の太行山脈沿いに位置する真定府域の開発が比較的顕著 の人口・耕地面積は大幅に減少。そこで大規模な入植政策が 明代畿輔の経済変容 北京への主たる米穀移出元であった可能性は高 元末以来、北京周辺地域 人口圧力も稀 (畿

及び河工技術に関する近年の研究成果等を丹念につき合わせた結整当てた。彼の事業計画、現地在住の地主官僚による記述史料、期、徐貞明なる人物により施行された当地の水田開発事業に焦点地における再生産のあり方の一具体例を見てゆくために、明代後地における水利開発事業について 最後に、当 補章 明末畿輔における水利開発事業について 最後に、当

のではなかった点が確認できた。果、徐貞明の方法論自体が、決して当地の生産方式に適合的なも

かる試みの一環を構成するものである。 す財政行為を、面としての首都空間の裡に定位した本論文は、か体的な経済構造との連関で捉える視点が稀薄であった。漕運といい。 田来の研究では、国家の賦役「収奪」を、特定地域における実

モンゴル時代ウイグリスタンの税役制度と文書行政

井太

松

一四世紀のモンゴル時代ウイグリスタンの税役制度とそれを機能は、ペルシア語史料群と漢文史料群とを主要な史料にはウイグリスタン(トゥルファン盆地を中心とする東部天山地方)に関するため、「モンゴル時代と漢文史料群とを主要な史料としてめざます。
 一四世紀のモンゴル時代ウイグリスタンの税役制度とそれを機能と当ます。
 一四世紀のモンゴル時代ウイグリスタンの税役制度とそれを機能を配置した方でのである。
 一四世紀のモンゴル時代ウイグリスタンの税役制度とそれを機能を配置した方である。
 一四世紀のモンゴル時代ウイグリスタンの税役制度とそれを機能を配置した方である。
 一四世紀のモンゴル時代ウイグリスタンの税役制度とそれを機能を配置した方式がある。

方法論的指針を確立するものである。

京大学の時に、モンゴル時代ウイグリスタンの税能論的比較検討から訂正した。次に、モンゴル時代ウイグリスタンの税役制度・支配制度の少なくない部分が、時代のに先行する唐王朝によって導入された諸制度に淵源を有し、さらに西ウイグル王国を経由してモンゴル時代に及んだことを論証らに西ウイグル王国を経由してモンゴル時代に及んだことを論証らにあってが、時代の大学の表別といる文書行政の諸相を剔出・解明することを目的とする。させている文書行政の諸相を剔出・解明することを目的とする。

第二章では、管見の五四件のウイグル文供出命令文書について、を書についての歴史学的考察を行なうための基礎的作業となるものであり、その捺印によって文書に公証力が付与されることを確認して、公印による文書分類の妥当性を示した。以上の作業は、文書についての歴史学的考察を行なうための基礎的作業となるものである。

析を行ない、供出命令文書の書式の全体的共通性を明らかにした。第三章では、ウイグル文供出命令文書全体を対象として書式分

を詳細に把握しつつ命令内容を決定していたことを論証した。 なしに踏襲されているという状況を想定した ものであること、公権力側が供出負担者=被支配民の負担能力 さらにこれらの文書により命令される物件供出は臨時・非正規の に成立しており、一三~一四世紀のモンゴル時代にも大きな変更 文書による物件徴発システム・文書行政システムが西ウイグル期 して供出命令文書の書式の全体的共通性の背景として、供出命令

結果、 的共通性に基づき、供出命令文書によって機能していた税役徴発 件徴発を排除しつつも、在地の住民組織・集団を公権力の末端と して活用することにより、住民把握と臨時・非正規の収奪とを確 書行政・物件徴発を運営し、現地ウイグル住民からの恣意的な物 =文書行政システムの実態的プロセスの再構成を試みた。その 第四章では、第三章で抽出したウイグル文供出命令文書の全体 モンゴル公権力はきわめて綿密かつシステマティックな文

という一次史料に基づき本稿で抽出されたモンゴル支配の具体相 主義」のもとに展開されていたことが指摘できる。現地出土文書 の上で文書を作成・発行して対応するような、いわば「文書行政 よるのではなく、 ンゴル支配は、一般に想定されるような軍事力・暴力装置のみに 以上、本稿での考察の結論として、ウイグリスタンにおけるモ 臨時・非正規の物件徴発に際しても詳細な手続

実なものとする体制を備えていたことを解明した。

つの礎石となり得るものである。 ユーラシア各地域におけるモンゴル支配を考究する上での一

は、

ものである。 は歴史研究のみならず言語学的・文献学的研究分野をも裨益する 筆者による原文書の実見調査の結果、大きく改善された。これら 書について、テキスト転写・和訳・語註を提示する。 八件を含み、その他の諸先学によって公刊されているテキストも には、筆者によって世界で初めてテキストが提出されるもの計一 資料編では、第一章~第四章で利用する計五四件の供出命令文 文書五四件

〈あえのこと〉のこと

近代日本民俗誌システムの探求―

菊 地 暁

性と政治権力性の問題― 民俗誌〈ethnography〉という表象技法の問題点と可能性を再想 研究対象とされた〈あえのこと〉の歴史的展開に即して再検討し、 に至った「表象」の問題 本研究の目的は、近年、人文社会科学において広く議論される ーを、 ―そこに不可避的に介在する詩的想像 日本民俗学、およびその中核的な

像することである。

近年の〈民俗学〉批判は、①高度経済成長後の社会変容に対する。といった類の見方――は必然的に再考を迫られることとなり方法を習得した「民俗学者」が客観的方法をもって採集・分析的方法を習得した「民俗学者」が客観的方法をもって採集・分析的方法を習得した「民俗学者」が客観的方法をもって採集・分析的方法を習得した「民俗学者」が客観的方法をもって採集・分析の方法を習得した「民俗学者」が客観的方法をもって採集・分析の方法を習得した「民俗学者」が客観的方法をもって採集・分析の方法を習得した「民俗学者」が客観的方法をもって採集・分析の方法を習得した「民俗学者」が客観的方法をもって採集・分析の方法を習得した「民俗学者」が客観的方法を追られることとなる。

志システム〉と呼称する——を再考することである。 される〈近代〉」の関係性の歴史として再概念化する。換言すれされる〈近代〉への対応として柳田国男により創出された〈民俗学〉の中で変容を遂げる〈民俗〉、およびその担い手である人々の営為を表象するプロセス——そしてその表象の磁場には、学問分野の制度的確立、文化財行政の整備、メディア、観光産業などの商業的諸制度の発達が介在する——、そのような巨大で複合的なシステムとしての〈民俗学〉――これを本研究では〈近代日本民俗学〉を「記述する〈近代〉」と「記述

奥能登の〈あえのこと〉は、収穫感謝、豊作祈願のために各家

あり、 嘗祭」として〈民俗学〉の言説に位置づけられたのである。 も共有される。以上の結果、〈あえのこと〉は、 されるのである。この「発見」は、昭和二七、八年に実施された 像は成長を遂げていたのである。やがて、昭和二六年、 された際であった。柳田はこの資料に〈日本人〉の同一性を解明 社会的格差を超えた〈日本人〉の同一性を担保する、「民間の新 作民族〈日本人〉の首長たる天皇家の新嘗祭の祖型として「発見」 による占領の終結を見越し、 する要素を予感し、検討を重ねていく。もっとも、 紹介されたのは、大正末年、 査資料に依拠したというよりは、 で家長が「田の神」を饗応する儀礼である。これが最初に文献に 「九学会連合能登調査」によって現地と結びつき、地元の人々に 「にひなめ研究会」が組織される。ここにおいてこの儀礼は、稲 柳田の構想する「固有信仰論」との関連においてのみ儀礼 柳田国男、三笠宮崇仁を中心とする 郡制廃止にともない、郡誌編纂がな 柳田の想像力自体の自己展開で 時代差、 その作業は調 連合国軍 地域差

者をこの儀礼に結びつける。そのような人々との接触・交渉を余文化財関係者、民俗学者、報道陣、観光客といった、多様な来訪なる。このことは、マスメディアや観光産業の影響と相俟って、なる。このことは、文化財行政にも影響する。昭和五○年、神社本庁このことは、文化財行政にも影響する。昭和五○年、神社本庁

本稿の最も大きい成果は、

留学生の集中した主要高等教育機関

が、現在の〈あえのこと〉を生起せしめているのだ。加えていく。多様な人々の接触・交渉を通じた言説と実践の堆積儀なくされた伝承者たちは、その過程で伝承にさまざまな改変を

〈民俗誌〉的実践を必要としているのである。り方への注視を要請し、そのあり方へと積極的に介入する新たな社会的実践の再検討は、〈民俗〉と〈民俗学〉の相互規定的なある。

近代日韓文化交流史研究

韓国人の日本留学

己煥

朴

学問の導入の実態及びその意義がそれぞれ論じられている。と、帰国留学生による近代学問の導入の実態を取り上げている本稿は、全部で三部で構成されている。つまり、第一部では、日本留学の始まった一八八一年から3・1独立運動の起こった一九一日本の始まった一八八一年から3・1独立運動の起こった一九一日本のが出る。のまでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、主要学校における留学の実態を取り上げている本と、帰国留学生による近代学問の導入の実態を取り上げている本と、帰国留学生による近代学問の導入の実態を取り上げている。

習得過程をはじめとする日本留学の実相は今まで未解明のまま放 設の主役であったにも拘わらず、日本における彼らの〝近代〞の を得なかった場合もあった。 簿の調査が不可能で、一覧や卒業生名簿など他の資料に拠らざる 代日本をめぐる知の連鎖状況の究明において絶対的に重要な意味 置されていた。韓国近代史や日韓文化交流史の再検討、 韓国人の留学生は、韓国近代のパイオニアとして韓国近現代の建 史研究ではまったく見ることのできなかった新しい内容を盛り込 における留学の実態を分析した第二部で、今までの韓国人留学生 をはじめとする官立学校7校であるが、官立学校の中では、 校 大学・日本大学をはじめとする私立学校十一校と東京高等商業学 本留学の実態を初めて明らかにしたのが本稿の第二部である。 大きな障害要因であった学籍簿調査の困難を克服し、 の調査が困難だったためである。このような留学生史研究の最も 資料の不足、なかんずく留学生の実体把握に必須不可欠な学籍簿 をもつこの分野の研究が不振に陥っていたのは、日本留学関連の んでいる。一九世紀末から二○世紀の初めにかけて日本に学んだ 二部で取り上げられている学校は、明治大学・早稲田大学・中央 (現在の一橋大学) や東京高等工業学校 (現在の東京工業大学) 韓国人の 或いは近

学術・産業など韓国社会の全分野にわたって先駆的な役割を果日本留学生は帰国後、抗日民族運動をはじめ言論・文化・教育

たと言える。 ら韓国の近代化と日本留学との関連ぶりの一端が浮き彫りにされ る検証に力を入れたつもりであるが、この作業により不十分なが 含む二人に関する既存の研究では蔑ろにされがちであった日本で 人の日本留学と帰国後の活動について述べた。ここでは、伝記を ていた法律専攻留学生の代表各たる金炳魯の二人を取り上げ、二 あった金性洙と、一九一九年までの日本留学生の半数以上を占め 本留学の具体例として、植民地下日本留学生界の大御所的存在で 日本留学と日本留学出身の教官らを媒介にして韓国社会に導入、 の〝近代〟の摂取過程とその〝近代〟の韓国への移植過程に対す 伝播されているのを究明している。なお、第三部の最後では、日 旧韓末と日本統治期における韓国の主要高等教育機関の教授陣と 代学問なかんずく法学・経済学・商学などの社会科学の諸分野が カリキュラムに対する第三部の分析により、西欧に源を発する近 していた社会科学に焦点を合わせて考察を行った。普成専門学校 たしたが、 いる本稿の第三部では中でも学術分野、特に近代学問の主流をな (現在の高麗大学校)や延禧専門学校(現在の延世大学校)など 帰国留学生による近代学問の導入の問題を取り上げて

稿によって、日韓文化交流史研究の大きな空白が埋められると同一は、近代以降の日韓関係の暗黒期における文化交流を扱った本終わりに、本稿のもつ意義を二つだけ述べさせてもらうと、第

になったということである。 韓国近代のあり方や近代日本をめぐる知の連鎖状況の把握が可能 の習得やその『近代』の自国への移植過程に対する考察によって、 の習得やその『近代』の自国への移植過程に対する考察によって、 時に、近代日韓文化交流史研究の端緒が開けたということであり、

物語理論への展望現代文芸学からみたヘイドン・ホワイトの

―島崎藤村の『破戒』・『夜明け前』との関連において

高 暎子

底するということに関しても述べた。

るのかを明らかにすることを目指す。れがいかにしてありのままの過去ないし真実に近づこうとしていホワイトのいうこの構造論的同一性とはいかなるものであり、そ性」を帯びているということに注目した。したがって本論文では、

の深層のレベルとされる「比喩」のあり方を考察した。

ということである。

がってここでは、物語の表層のレベルとされる「筋立て」と物語ける物語理論がナラトロジー(物語論)と区別されねばならないということを「物語」と「比喩」と「筋立て」の概念と結びつけとが高いまする、意味の生成の場としての側面をもつからである。ここで「物語」は表層のレベルの説明の仕方と深層のレベルでの認識の仕方とに分けて考えることができる。ホワイトにしたま約的での認識の仕方とに分けて考えることができる。ホワイトにしたがある。ここで「物語」は表層のレベルの説明の仕方と深層のレベルる。ここで「物語」は表層のレベルの説明の仕方と深層のレベルを選示を担合した。というのというによりにおいる。

がリアリティをもった物語として読まれた時代の形式原理にも通がリアリティをもった物語として読まれているのかを考察した。そのさい「ありのまま」の対象世界がいかなる物語時間や言語表そのさい「ありのまま」の対象世界がいかなる物語時間や言語表の『破戒』をとりあげ、「リアリズム文学の物語は、決して内容的な側面としての対象世界のみを究明するだけでは不十分であるとな側面としての対象世界のみを究明するだけでは不十分であるとな側面としての対象世界のみを究明するだけでは不十分であるとな側面としての対象世界のみを究明するだけでは不十分であるとな側面としての対象世界のみを究明するだけでは不十分であるとなりでは、「単一では、」を表示している。

じ次元に収束できるとする認識法、②大きな物語と小さな物語をいかなる表象原理に基づいているのかについて検討した。そこで具体的な分析方法として、第一に歴史小説における過去の出来事具体的な分析方法として、第一に歴史小説における過去の出来事と物語の登場人物とはいかなる意味で結ばれているのか、最後に歴史れようとしているのか、という問題を設定した。そしてこれらはれようとしているのか、という問題を設定した。そしてこれらはれようとしているのか、という問題を設定した。そしてこれらはなる次元のさまざまな出来事は語り手の思惟の様態によって同異なる次元のさまざまな出来事は語り手の思惟の様態によって同異なる次元のできるとする認識法、②大きな物語と小さな物語をいかなる表象原理に基づいているのかについて検討した。そこでいかなる表象原理に基づいているのかについて検討した。そこでいかなる表象原理に基づいているのかに対した。そこでいかなる表象原理に基づいているのかにありませいるのかにあります。

る

融合させた認識法、③「言葉から歴史に入る」という認識法であ

まと物語との新たな関係の構築をはかるものであると言わねばない。 まと物語との新たな関係の構築をはかるものであると言わねばない。 まと物語との新たな関係の構築をはかるものであると言わねばない。 というのまま」の過去ないし真実は表象化されないからである。 というのもその過程においてし というのもその過程においてし というのもその過程においてし というのもその過程においてし というのもその過程においてし というのもその過程においてし

ケージと日本

--戦後現代音楽の布置

上野正章

置が変化するメカニズムを明らかにする。

第一部では、一九四五年から一九五一年、すなわちアメリカ占領下における日本の現代音楽の状況が取り扱われる。この時代、領下における日本の現代音楽の書及が積極的に押し進められていった。一て現代アメリカ音楽の普及が積極的に押し進められていった。一方当時の楽壇は、戦前から引き続き活動していた人々で占められていた。彼らの視座は、現代音楽は作曲家の出身国家によってカテゴリーと合致して、当時の人々の視座に滑らかにおさまっていった。すでに当時十二音音楽やケージの初期作品も紹介されてはった。すでに当時十二音音楽やケージの初期作品も紹介されてはいたが、両者とも散発的な言及にとどまる。

 も高まっていった。

楽は、 持ったのはケージの思想的背景である。また彼らの活動は音楽に 全国で演奏会を開く。これまでの音楽の概念を越えたケージの音 たケージの音楽をきっかけに、 ケージは、 事態が収拾に向かうのは一九六○年代後半になってのことである。 とどまらず、 あったと言えよう。また一九五〇年代中頃から、少数派ではある 第三部は、ケージの音楽が初演された一九六○年代の状況であ セリー音楽と対置されて音楽史に位置づけられていった。ま 前衛芸術運動の昂揚の中で、一九六二年にケージが初来日し、 ケージの音楽が研究・紹介されはじめていた。彼らが興味を 在野の芸術家集団である「実験工房」でも、 日本中に大きな衝撃を与え、ケージに関する言葉が溢れた。 彼の提唱した偶然性の音楽という作曲技法から理解さ 芸術のジャンルを越えた独創的なものであった。 空間を構成する環境芸術への関心 秋山邦晴を中心

> な力学的な関係を念頭に置いて、一九七○年以降の日本における 生み出し、またそれを変化させて行く。今後の課題は、 外部の可能性を探求する。両者の相互作用が、様々なケージ像を ジのコンサートに立ち会ったことが契機となり、 者の秋山は一九六〇年代後半から西洋芸術の理論を基礎に、 である。 ケージの音楽を検討することである。 自身の芸術論を再構築し始める。 いはケージの中に入って内側からケージを紹介するかという違 とはいえ、両者は相互に影響を与え続けた。 他方、 前者の吉田や黛は、 西洋芸術音楽の 例えば、後 自分 ケー

である。いわば、ケージを西洋音楽の視座から観察するか、あるけると、三つのグループが浮かび上がってくることである。すなた人々と、実験工房のような在野で活動し、ケージを西洋音楽とた人々と、実験工房のような在野で活動し、ケージを西洋音楽とはまた別の、もう一つの音楽のあり方として紹介していった人々はまた別の、もう一つの音楽のあり方として紹介していった人々はまた別の、もう一つの音楽のあり方として紹介していった人々はまた別の、もう一つの音楽の視座から観察するか、あるである。いわば、ケージを西洋音楽の視座から観察するか、あるである。いわば、ケージを西洋音楽の視座から観察するか、あるを表によりのである。いわば、ケージを西洋音楽の視座から観察するか、あるはまた別の、これにはいいたのでは、これにはいいたのは、これにはいいたのでは、